

私の書斎の壁には〈空〉の一文字が大きく書かれた色紙が掛けてある。それは言葉には、意味があるだけでなく、唇や舌に残す感触、つまり、肌ざわりとでも言うべきものがあり、「そら・くう・から」と発音するとき、そのひびきや味わい、それが私の心に呼び起こすイメージが好きだからである。とは言え、それだけのことではわざわざ壁に掛けているのではない。それには深いわけがある。

それは四十五年前、文通していたオハイオ州・シンシナチ市の小学校の先生から頂いた手紙に始まる。手紙の趣旨は「生徒が授業中さわがしく、授業が終わるや否や、デイトの約束をとりつけるため廊下の電話ボックスに殺到して困っている。日本の生徒は授業が始まる前に座禅をして、静かに授業を受けているというが本当だろうか。そうだとしたら、その座禅と禅の心について教えてほしい」というものだった。

当時の英語の教科書はニューヨーク・ロンドン・パリなどの写真がおいでと語りかけているようで、アメリカは私の憧れの国でもあった。それに私の学校では生徒の塾通いも少なく食い入るように先生の話に耳を傾けていた。それだけに生徒が授業中にさわがしくて困っているというのにはびっくり。それはともかく、座禅と禅の心を教えてほしいと言われても無宗教の私は返す言葉がない。とは言え、知らぬ存ぜぬでは貴重なペンパルを失うことになりかねない。そこで座禅と禅の心について調べることにした。

まず座禅だが、座禅は仏教で悟りを開く修行の一つとして行われるもので、私の学校の生徒は、先生が教室にやってくる前に静座して、授業に集中できるように黙想しているだけのこと、座禅と言えるものではない。そこで僧侶が座禅をしている写真と、正座して左掌を右掌にのせ、親指と親指とを接して、目を半眼に開き、呼吸をゆるやかに整えるといった座禅の形を知らせることにした。次に禅の心だが、壁面座禅によって心を空にするというのだ。〈空〉は〈そら〉でも〈から〉でもない〈くう〉である。つまり、私たちの体は父と母からうけ、赤と白の二滴、すなわち因と縁とによって生じた身体であって、もともと空というのだ。それで座禅をして無一物の姿になるならば、そこには愛も憎しみもなく、苦しみも楽しみもなく、ただ広く明るい世界が拓けてくるという。

日本人なら座禅をしなくても〈空〉という言葉から、心を空にするという禅の心を推測することができるだろう。だが、心を空にするというときの〈空〉を英語でどう説明したらいいか分からない。和英辞典で〈空〉を引くと「ナッシング・エンプティ・アンリアル」とあるだけ。こんな単語を並べてみたところで分かるはずがないし、第一失礼である。それに私の心は、空どころか、欲の皮でばんばん。そんな私にオハイオの先生はもちろん人様に禅の心を語る資格はない。それでしばらく返事を出せずにいた。

そんなある日、偶然にも、欧米人観光客に禅の心を英語でどう説明したらいいか悩んでいた龍安寺の住職が「アダムとイブが林檎を食べる以前の心境だと話したら領いてくれた」とテレビで話しているのを見た。アダムとイブが林檎を食べる以前の心境がどんなものか、また、それが禅の心の〈空〉に通ずるものかどうか分からないが、一瞬、目から鱗が落ちるとは、こんなときの気持ちを言うのだろうと思った。それは日本語と英語の表現形式の違いを肌で感じた一瞬でもあった。それで禅の心については、後日、詳しくお知らせしますと書いて、とりあえず住職の言葉と龍安寺の石庭の写真を同封して送った。

それから数日後、こうした日英両語の表現形式の違いを実際にアメリカ人と話すことの中から学びたいという思いから、私は仲間を誘って数人のアメリカ人を小倉城の桜の花見に招待した。満開の桜の木の下で酒を酌み交わしながら「散る桜 残る桜も、散る桜」と西行の句を引き合いに出して、人生の無常というか、日本人の人生観についてジムというアメリカ人に語りかけてみた。ところが、ジムはそれには知らぬが仏の顔で「あの城の高さはどのくらいあるのか」と聞いてきた。これまで城の高さなど聞かれたこともなければ考えたこともない。それで顔をしかめて天守閣を見上げて目測していると「いつ、だれが建てたのか」と聞いてくる。私は築城年はもちろん、細川○○？ とだけしか答えられない。知らないことは恥というより罪。つくづくそう思うと同時に、豪華な満開の桜、舞い散る花びら、苔むした石垣にうつり酔いしれるものと思っただけに、なにかしら裏切られたような寂しい気持ちになった。

しかしそれは日本人とアメリカ人の思考形式の違いによるものであって、それに気づいてきた私が、人間の言葉というものは、その背後にそれぞれの文化を背負っているものだとということを実感した一瞬でもあった。それは古代から紙と木を基調として育んできた日本人の、ものあわれ↓幽玄↓わび・さび・↓粹、といった美意識を意志を基調にして育ってきたアメリカ人に納得させるのは難しいことだという思いでもある。そうであっても、私はオハイオの先生に禅の心について知らせなければならぬのだ。そのことに焦りを感じていたある日、仏教学専門の某大学教授が〈空〉について論理的に分かりやすく説明している記事に出会った。

要約すると、〈空〉は仏教思想において最も重要な教えの一つであって、否定と肯定の両方の意味を持っている。だが世間では「から・あき・むなし」などの意味で把握され無の面だけが強調されているようだ。〈空〉は古代インドの文語であるサンスクリット語の訳語で〈無〉と漢訳されているが、語源は「膨れる、成長する」という意味である。たとえばサッカーボールは、外から見ると膨れているが、なかは空の状態である。数字のゼロも、語源はサンスクリット語で、プラス、マイナスの両方になる可能性をもっている。人間も肉体、精神の諸要素からなる点では、「膨らんだもの」であるが、精神は見えないもので、この絶対的、実体的存在がないことを〈空三〉という。すべては〈空〉であって、夢・幻のごときものである。本来、聖でも俗でもないものを、聖とか俗とか判断するの

は、言語上の区別にすぎず、〈空〉という点では、両者は同じである。

翌日、私は妻に頼んで二枚の色紙にそれぞれ〈空〉の一文字を書いて貰い、その一枚の色紙にこの記事を英訳した文章を添えて、オハイオの先生に送った。そして残りの一枚を書斎の壁に掛けたのだった。

その日から四十五年の歳月が流れ、この春、喜寿を迎えた私は、ガンを宣告され八十歳まで生きられるかどうかと言われている。地球もガンに侵されたみたいにな、あつちこつちで異常気象や武力紛争を起こしている。やがて地球が消滅するとして、それを救う天の声として、漢字一文字を選びなさいと言われたら、私は迷わず〈空〉と答える。